２０２０／１０／０４　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　副牧師

主　　題：苦難の中にある安らぎ
聖書箇所：詩篇　３篇

テーマ：苦難の中で私たちはどのようにして安らぎを得られるのか？

今朝、私たちがともに学びたいみことばは「詩篇３篇」です。この箇所を読みます。

詩篇３篇　　ダビデがその子アブシャロムからのがれたときの賛歌
3:1 【主】よ。なんと私の敵がふえてきたことでしょう。私に立ち向かう者が多くいます。
3:2 多くの者が私のたましいのことを言っています。「彼に神の救いはない」と。　セラ
3:3 しかし、【主】よ。あなたは私の回りを囲む盾、私の栄光、そして私のかしらを高く上げてくださる方です。
3:4 私は声をあげて、【主】に呼ばわる。すると、聖なる山から私に答えてくださる。　セラ
3:5 私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。【主】がささえてくださるから。
3:6 私を取り囲んでいる幾万の民をも私は恐れない。
3:7 【主】よ。立ち上がってください。私の神。私をお救いください。あなたは私のすべての敵の頬を打ち、悪者の歯を打ち砕いてくださいます。
3:8 救いは【主】にあります。あなたの祝福があなたの民の上にありますように。　セラ

皆さん、ひと月ほど前のことですが思い出してください。私たちはともに詩篇１篇と２篇を学びました。１篇からは「幸いな人はどのような特徴を持っているのか」を学び、２篇からは「幸いな人はだれにその幸せを見出すのか」を見ました。この世界の人たちはだれもが例外なく幸せになりたいと願っています。しかし、本当に幸いな人は悪から離れ主のみことばを愛し、必ず勝利される主に信頼を置く者でした。また、聖書が教えている「幸せ、幸い」とは、この世が考えるような感情や状況に左右されるものでもありませんでした。どんなときにも主に身を避け、主のうちに実を結ぶ者こそ心からの喜びをもって日々を生きていくことが出来るのです。

こうして二つの詩篇から、私たちは聖書が教える真に幸いな人がいったいどのような存在かを考えました。そして、ここにおられる皆さんひとり一人はこの幸いな人として、心を満足で満たしながら日々を歩んでいこうとされているでしょう。どんなときも主を覚え、主に身を委ねながら最高の満足をもって生きていこうと…。しかし皆さん、実際はどうでしょう？私たちはいつも変わらずそのように歩むことができているでしょうか？カウンセリングに関する本をいくつか記しているウェイン・マック先生はこの世界に住む私たちの姿をこのように描いています。「この罪で呪われた世界にあって失望を味わうことなく生きることなど到底ありえない。自分や愛する者の健康がすぐれないかもしれないし、同僚や家族から笑い者にされたり、嫌がらせを受けるかもしれない。失敗をしたり、自分の中で繰り返されてる罪を認めることもあるだろう。私たちの周りの世界で起こる出来事、教会内の問題、それ以外にも数え切れないほどの問題が存在するのだ。今、自身を落胆させるようなことを人生で経験していようとなかろうと、必ず、いつかはするだろう。イエスさまは『あなたがたは、世にあっては患難があります。』（ヨハネ１６：３３）と警告されたのだ。」

私たちはみないつも平安をもって生きていくことを望んでいます。だれひとり望んで困難や苦しみを経験したいとは思いません。しかし同時に、それらが私たちの日常に隣り合わせにあるということを私たちはよく知っています。そして、様々な機会に様々な苦難を経験し、その結果として心の満足を失ってしまうことがあるのです。ある時は私たちの経験する困難が何の理由もなく降りかかって来ているように感じることがあります。自分は特に何もしていないのに突然病気になったり、職を失ったり、友人に裏切られることがあります。また、自分の思い描いていた計画が急に思い通りにいかなくなったことで不安に駆られることもあります。家計をやり繰りして将来はこのようにしようと考えていたことがいっさいうまくいかず、突如として先が見えなくなって恐れを抱くことがあります。自分の頭では理解できないことや自分の手に負えないことが私たちの身の回りには起こります。すると心が「どうして？なぜ？…」という疑問でいっぱいになり喜びを失うことがあるのです。

また、ある時は、私たちの経験する困難が私たちの誤った選択や行動によって降りかかって来ることもあります。私たちは私たちの犯した罪が原因で罪悪感に苛まれたり、心が重くなることもあるのです。「どうしてあんなことをしてしまったのだろう…、どうしてあんなことを言ってしまったのだろう…」と、そんな思いが心から平安を奪うこともあります。それ以外にも、現在、私たちは武器を持った兵士にいのちを狙われるというような恐れを抱くことはありませんが、噂話やゴシック、嘘などで私たちは

人を深く傷つけたり、傷つけられたりすることがあります。私たちが「あの人は自分のことを噂しているのではないか？」とそのように考え出すときに、私たちの心からみるみるうちに平安が奪われていくことを経験したことがあるはずです。また、悪意あることばは実際に人を死へと追いやることもあります。武器がなくても私たちはことばの武器でもって人を死へ追いやることもあるのです。私たちが犯した間違った選択によって様々な関係が傷つくこともあります。それは夫婦間であったり親子間であったり、学校や職場などあらゆる場面においても起こることです。

私たちは私たちだけでなく、私たちの敵であるサタンが今まさに私たちの目をキリストから奪い、心にある喜びを奪おうとしていることもよく知っています。ですから、この世界が罪とサタンの支配下にあり、私たちひとり一人が罪をもっている以上、残念ながら、私たちは失望を経験し、心が揺らぎ、平安を失ってしまうような場面に数多く遭遇するのです。まるで、自分の周りにあるものがすべて敵のように感じ、また、自分の内側は自分の罪を責め、いろんな恐怖に追い詰められて希望が見い出せず、不安で夜も眠れないことがあります。このようなことを私たちはこれまでも、また、今まさに経験しているかもしれません。いったい、この苦しみの中でどうすればいいのか、どうすればこの中で満足を持つことができるのか？と、このような苦難、戦いに私たちは例外なく日々の生活を通して直面するのです。

では、皆さん考えてみてください。そのような状況に置かれた時、私たちひとり一人どのように振舞っているでしょうか？自分の心が重く、不安や恐れで苦しいとき、どのようにして私たちは希望を見出し再び平安をもって歩んでいくことができるのでしょうか？そもそもそんな暗やみの中から抜け出す方法があるのでしょうか？感謝なことに、みことばは私たちにその答えを教えてくれています。

自分自身もいのちの危険を感じ希望を見出すことなどできないそんな絶体絶命の中にいたダビデが、この詩篇を通してその問いに対する答えを教えてくれているのです。その答えとは「喜びを見出すことが難しく思われるような苦難の中でも、私たちは安らぎを見出すことができる」ということです。では、どうすれはその安らぎを手にすることができるのでしょう？いったいどのようにしてダビデは安らぎを見出すことができたのでしょう？この詩篇３篇には困難の中でダビデが安らぎを見出すことができた三つの秘訣が記されています。今日はこの秘訣をともに学んでいきましょう。どうか、このみことばが皆さんひとり一人が苦難に置かれるときの励まし、また、慰めとなることを心から祈っています。

☆苦難の中で安らぎを見出すための三つの秘訣

１．主に自分の状況を打ち明けること　　１－２節

「:1 【主】よ。なんと私の敵がふえてきたことでしょう。私に立ち向かう者が多くいます。:2 多くの者が私のたましいのことを言っています。「彼に神の救いはない」と。」　、秘訣の一つ目は「主に自分の状況を打ち明けること」です。ダビデは自分がどのような状況に置かれているのか、そのことを主の前に正直に告白しました。「自分に立ち向かう敵がたくさんいていのちがねらわれています。主よ、私は絶望的な状況にいます。」とそのように打ち明けたのです。でも皆さん、そもそもいったいなぜダビデはこのような窮地に置かれていたのでしょう？特に、この詩篇３篇は聖書には「３篇」の下に表題、タイトルが付いています。これまで見た詩篇１、２篇とは異なっていると見ることができます。この表題は元のヘブル語の原文にも含まれているもので、だれかが勝手に書き加えたものではありません。表題も神の霊感を受けているのです。そして、このタイトルによれば「ダビデがその子アブシャロムからのがれたときの賛歌」です。どうしてダビデは自分の息子から逃げなければいけなかったのでしょう。

<u>ダビデの歴史</u>

そのことを正しく理解するためにはその歴史的背景を知っていることが大切です。少し、ダビデの歴史を振り返ってみましょう。Ⅱサムエル記１２章から、すべてを見ることは出来ないので皆さんは時間をとって読んでみてください。私たちもよく知っている通り、イスラエルの王であったダビデはいつもみこころに適った歩みをし、神を喜ばせて生きるすばらしい人物でした。そんな彼を神は祝福し、彼の王座はこれまでの王よりも揺るがない栄えに満ちたものでした。しかし同時に、ダビデも私たちと変わらない罪人のひとりでもありました。よく知っている通り、バテシバと姦淫の罪を犯し彼女を手に入れるために彼女の夫であるウリヤを殺害したのです。

後に、主が預言者ナタンを用いてこの罪を責められたときの様子が今見ている１２章に記されています。その中で主はこんなことばをダビデに与えるのです。１２：１１**「【主】はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。…」**と。ダビデはナタンによって自分の罪が責められたとき、その罪を認め心から悔い改めました。そして、神もあわれみをもって彼の罪を赦されたのです。しかし、彼の犯した大きな罪は彼の人生に多大な影響をもたらすことになります。主がここで言われたように、そのことば通りにその罪が彼の人生のターニングポイントとなり、様々な問題が彼の家族によって彼の身にもたらされていくようになるのです。そのことが１３章から後に記されていきます。１３章からは彼の家族によってもたらされる問題の数々が描かれているのです。

ダビデにはアムノンという息子がいました。アムノンは異母兄弟であったアブシャロムの妹タマルに恋をし、自分のものにしようとレイプをし辱めたあげくに彼女を拒絶しました。そのことを知った兄アブシャロムはアムノンのことを憎むようになり、ついに、彼の部下にアムノンを殺させてしまうのです。家族の中で性的な罪が起こり、悲しみや憎しみがそれぞれの心の中に充満し殺人まで起きてしまいました。いったい、父ダビデはこれらの罪に対してどのように対応したのでしょう？

聖書を読むなら、残念ながら、ダビデはこれらの問題に対して正しく向き合おうとはせず、問題を解決しようとはしませんでした。アムノンに対してもタマルに対しても、アブシャロムに対しても彼は父親としての責任を果たさなかったのです。そして、その結果、アブシャロムはそんな父ダビデに逆らうことを計画していくようになります。そのアブシャロムはサムエル記には**「さて、イスラエルのどこにも、アブシャロムほど、その美しさをほめはやされた者はいなかった。足の裏から頭の頂まで彼には非の打ちどころがなかった。」**（１４：２５）と書かれています。そえゆえに、イスラエルの多くの人たちの心に取り入り、数年かけて彼らの心を盗んでいきます。そうして、ダビデに仕える兵士たちも、ダビデを一番近くで支えた議官アヒトフェルという人物も、ダビデの友人たちや民もアブシャロムとともにダビデに対して謀反を起こすことになりました。

その知らせを受けてダビデは慌ててエルサレムから自分にまだ忠誠を誓う者たちと逃げ出し、荒野をさまようことになります。彼らがどれほどの悲しみを抱いていたのか、そのことが少し先の１５：３０にこのように書かれています。**「ダビデはオリーブ山の坂を登った。彼は泣きながら登り、その頭をおおい、はだしで登った。彼といっしょにいた民もみな、頭をおおい、泣きながら登った。」**と。これがこの詩篇３篇を記したダビデが置かれていた状況でした。

そのことを頭に入れて詩篇３篇に戻ってダビデの叫びに耳を傾けてください。ダビデはこのように言いました。**「:1【主】よ。なんと私の敵がふえてきたことでしょう。私に立ち向かう者が多くいます。:2 多くの者が私のたましいのことを言っています。「彼に神の救いはない」と。」**、ここでダビデは**「ふえてきた」「多くいます」「多くの者」**と数が多いことを強調しています。また、ここに「敵」ということばがありますが、このことばは元々「狭い、圧迫感を強調する」という意味をもったことばで、そこから「弾圧する者、圧力をかける者」という意味で用いられたりします。要するに、ここでダビデは自分を囲む敵の数がどんどん増え続けていること、そして、自分自身がその敵の圧力によって益々追い詰められていることを表したのです。ダビデは肉体的にも精神的にも追い込まれていました。

そして、そんな苦しみの中にいるダビデに、敵はこのように追い打ちをかけるのです。**「彼に神の救いはない」**と。彼らは言います。「これまでは神はあなたのことを助け力を与えて来たかもしれない。しかし、今回ばかりはその神の助けはあなたにはない。あなたはもう終わりだ。」と。想像してみてください、皆さん。ダビデにとってどんどんと増し加わって来る敵は自分の知らない人たちではありませんでした。かつて、自分と笑いと涙をともにした友人たちが、かつて自分が率いて多くの戦いでともに勝利の喜びを分かち合った兵士たちが、そして、自分の愛する民や息子までもが自分のいのちを狙って迫って来ているのです。いったい、どれほどダビデは取り乱し、悲しみや恐怖、不安で心がいっぱいになっていたことでしょう。

また、ダビデは主のことばを思い返していたはずです。まさに、主が「家族からあなたの上にわざわいが起こる」と言われていたことが目の前に起きているのです。だからこそ、自分が犯した罪を思い返して、どうして自分はあんなことをしてしまったのだろうと、そんな後悔や罪悪感、絶望を抱いていたかもしれません。彼の置かれていた状況は喜びをいっさい見出すことの出来ない絶体絶命、最悪のものでした。もし、私たちがこのダビデの立場にあるなら、私たちはどのように振舞うでしょう？恐らく、自分にはどうすることもできない苦しみを経験するとき、私たちが最も取ってしまう行動は、自分の置かれている状況に対して文句を言うことでしょう。「どうして？」「なぜ？」と、そうして自分の不満を人や神に向けてしまう弱さを私たちは持っています。

また逆に、苦しみが降りかかって来ると、自分の殻に閉じこもり「自分はもう見捨てられてしまったのだ」と一人で悲しみにくれるかもしれません。私たちは問題が大きくなるほどに絶望しパニックに陥ってしまうことがあるのです。しかし、ダビデはそのような応答をしませんでした。彼がしたことは、自分が置かれている状況や、自分の感情や気持ちをすべて主の前に言い表したのです。ダビデは別の詩篇でもこのように叫んでいます。詩篇１４２：１－２「**:1 私は【主】に向かい、声をあげて叫びます。声をあげ、【主】にあわれみを請います。:2 私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、私の苦しみを御前に言い表します。」**、

主の前に自分の嘆きや苦しみを言い表すことは、神に対して不満をぶちまけることでも、「なぜ？どうして？」と神を責め立てるのでもありません。私たちはそんなことをするべきではありません。ここで「言い表す」ということは、自分の持っているいろいろな思い、感情、置かれている状況を素直に主の前に持っていき、そして、その主にただ委ねることです。私たちの主はそのような思いを聞き入れ、

そして、あわれみを示してくださる方です。ペテロもこのように言っています。Ｉペテロ５：７**「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」**と。

苦難の中にあるとき、私たちはダビデと同じように自分の苦しみや悲しみ、不安などすべてのことを主に言い表すことができます。私たちのことを心配してくださるそのお方にすべてのことを委ねることができるのです。

２．主を覚え信頼すること　　３－６節

次に「苦難の中で安らぎを見出すための秘訣」の二つ目が３－６節に記されています。それは「主を覚え信頼すること」です。ダビデは自分に向かって迫り来る敵の数や、心を失望させるような彼らのことばに心を振り回されるのではなく、自分の主がどのようなお方か、その真理に心を留めたのです。ダビデはここで信頼する主の姿を特に四つ描いています。

〇信頼する主の四つの姿

ａ）私の周りを囲む盾

まず一つ目に「主は私の周りを囲む盾」と言いました。文字通り、ダビデにとって神はどんな敵の攻撃や危険からも自分を守ってくれる盾でした。その生涯を通して様々な戦いを経験し、ときに死の危険を感じることも彼は何度も経験しました。自分より遥かに大きく力強いゴリヤテに対峙することもあったし、自分のことを妬み憎んだサウル王にいのちが狙われることも経験しました。しかし、どんなに厳しい状況にあってもいつも神は彼を守り続けて来られたのです。

サウルの手から救い出された時、ダビデはそのことを感謝して詩篇１８篇でこのように歌いました。１８：２－３**「:2 【主】はわが巌、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。:3 ほめたたえられる方、この【主】を呼び求めると、私は、敵から救われる。」**、彼にとって、これまでも決して揺るぐことのない安心の拠り所だった主は、今の困難の中でも、また、この先どんな苦境を迎えることがあったとしても、必ず傍にいて自分を守ってくださる盾だと覚えたのです。

ｂ）　私の栄光

二つ目に「主は私の栄光だ」と言いました。この表現を聞いて少し違和感を感じる人がいるかもしれません。なぜなら、私たちは普通この「栄光」ということばは人ではなく神に対して用いることが多いからです。しかし、ここでダビデは「主は私の栄光だ」と言いました。いったい、どう意味で言ったのでしょう？それはダビデにとって、主が自分の誇り、自分の名誉だということです。

すべてを捨ててエルサレムから逃げ、荒野をさまよっていたダビデ。人間的に考えるなら、誇りとすることのできる王位や権力、兵力や財力、また、自分の国さえも彼は失いました。自分の失ったものの大きさから悲しみと喪失感に苛まれても仕方なかったかもしれません。しかし、彼はそんな中にあっても確信をもってこう言うのです。「確かに、私はすべてのものを失った。しかし、私には神がいてくださる。どんなものにも比べることのできないすばらしい神が私とともにいてくださる。私には私の誇りである主が今傍にいてくださる。それは私にとってこの上もない名誉なことだ。」と。

ｃ）私のかしらを高くあげてくださる方

三つ目に「主は私のかしらを高くあげてくださる方」と言いました。思い返してください。ダビデと彼に従ってアブシャロムから逃げた人たちはオリーブ山を登るとき、悲しみにくれ絶望にうちひしがれていました。「ここからどこへ向かって行けばいいのだろう？いったいだれを信頼できるのだろう？神さまは自分のことを見捨ててしまったのではないか？」といろいろな思いを抱えてダビデは肩を落とし、希望も見えず、彼の顔は失意に沈み下を向いていたのです。

しかし、そこでダビデは思い返すのです。主は私のかしらを高く上げてくださるお方だと。今、自分はこのような苦しい状況にあるけれども、私の主は必ずこの状況から私を助け出してくださる。主はこんなに弱っている私さえもあわれみをもって力付け、勇気を与え、心に喜びを与えることのできるお方だと言うのです。沈んだ私の腕をつかみ再び立ち上がらせてくださる、そんな主だと覚えたのです。

ｄ）私の声に応えてくださる方

そして、最後の四つ目に「主は私の声に応えてくださるお方だ」と言いました。彼は自分の主がいったいどのようなお方なのか、また、これまでどのようなことを成し遂げて来られたのか、そのことをよく知っていました。彼は主がこれまでも自分の祈りに答え、助けを与え続けてくださったことをよく覚えていました。そして、今回も必ず主は自分の叫びに答えてくださるとそんな確信を抱いていたのです。

また特に４節、主が彼に答えられる場所に注目してください。ここで「主は**聖なる山から私に答えてくださる。」**と記されています。皆さん覚えておられるでしょうか？詩篇２篇で、人間の愚かで浅はかな計画に対して主はこう答えられました。６節**「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」**と。このダビデは主が選び主がイスラエルの王として油を注いだ者でした。また、この**「聖なる山」**とは主との契約の象徴として契約の箱が置かれている場所でもありました。だからこそ、彼はこのこ

とを思い出して、自身に言い聞かせたのです。「確かに、今は苦難の中にあって先が見えない。でも、主はこれまでも私の祈りに答えてくださった。主はこれまでも約束を守られて来た。だから、今回も主は必ず約束を果たされる。私の叫びの声に答えてくださる。」と、こうして苦難の中にあったダビデは、自分の主がどのようなお方かを覚え、この方に信頼したのです。

その結果、皆さん見てください。５節に彼はどうしたと記されていますか？**「私は身を横たえて、眠る。」**と。すごいと思いませんか？彼は眠ったのです。彼を追いかけて来ていた敵は消え失せていたのでしょうか？　いいえ。何かこの状況を打破する解決策を彼は見出したのでしょうか？いいえ。彼を取り囲んでいた状況には一切変化はありませんでした。彼は変わらず絶望的な状況にあったわけです。しかし、彼は安心して眠ることができました。自分の主がどんな時も自分を支えてくださるお方だと心に留めることで、ダビデは苦難の真っ只中で安らぎを見出すことができたのです。

ここで私たちが覚えるべき大切なことがあります。それは、本当の安らぎというのは、私たちの置かれている状況が改善したからとか、その状況を打開する解決策を手にしたから得られるものではないということです。本当の安らぎとは「苦難の真っ只中にあって主に信頼する者が味わうことのできるもの」です。

では、私たちはどうでしょう？私たちは苦難の中に置かれたとき、この主を覚え、主のうちに安らぎを見出すことができているでしょうか？それともいつも不安に駆られ、眠ることができないでいるでしょうか？これまでも見て来た通り、私たちは様々な場面で困難に直面します。私たちは例外なく不安を抱くことも、心が落ち着きを失うことも、失望することも、恐れを抱くこともあります。問われているのは、そのような不安や恐れに対して私たちがどのように向き合っているかということです。そしてもし、これらに対して私たちが正しく応答していないのであれば、それは大きな問題です。なぜなら、聖書は繰り返し「何も思い煩わないように」と命令を与えているからです。言い換えれば、不安や恐れを抱き続けることは罪だということです。

では、少し考えてみてください。私たちはどんな時に恐れを抱き、平安を失ってしまい易いでしょうか？もちろん、様々な場面を思い浮かべることができると思いますが、少なくとも次の二つの考えが私たちのうちを支配するとき、不安に駆られることが多いと思います。

１）　私たちが神よりも自分たちの経験しているものを大きく考えるとき　：　そのときに私たちの心は平安を失ってしまいます。私たちは自分の抱えている苦しみ、悲しみ、問題を必要以上に大きくしてしまうことがあります。例えば、自分の抱えている問題を考えれば考えるほど、その問題がどうしようもない深刻なものに感じられ、恐れや不安の気持ちが心の中で増え広がっていくこと、そのようなことを経験したことはないでしょうか？

２）私たちが神よりも自分自身を大きく考えるとき　：　これも私たちの心は平安を失ってしまいます。私たちは聖書が繰り返し神がこの世界の主権者でありこの方に不可能なことなどないと教えていることを知っています。エレミヤ書３２：１７には**「ああ、神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。」**とあります。

私たちは神がすべてのことを知っておられ、すべてのことを支配されている全能なお方だと信じています。また同時に、この主権者なる神は私たちのことを愛し、どんな状況にあっても守りを与えてくださる方だということも知っています。 ローマ８：２８に**「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」** と書かれていることを信じています。

でも、実際に自分の手に負えない苦しみが起こったときはどうでしょう？次々に自分の心を苦しめるような試練を経験し、先の見えない暗闇に放り出されたかのように感じるときはどうでしょう？自分にとって大切なものや大切な人を失ったらどうでしょう？理不尽に人に責められ、自分の気持ちが踏みにじられたらどうでしょう？自分が考える最善が上手くいかず、自分の計画がことごとく失敗すればどうでしょう？そんな中にあっても変わらず神の力と約束を信頼し続けることができるでしょうか？

「神さまで十分です」、それとも「主は私の置かれている状況を分かっておられない。もし主がすべてのことを支配しておられるなら、こんなことは起こらないはずだ。主は私のことを愛しておられない。守っておられない。主に信頼すること、それは確かに大切だと分かるけれども、私にはもっと何か他のものが必要です。」と言いますか？ジョージ・ミュラーはこのように言っています。「不安の始まりは信仰の終わりであり、真の信仰の始まりは不安の終わりである。」と。

私たちの心は変わります。状況も変わります。しかし、主とその約束は決して変わることはありません。だからこそ、私たちが苦難の中で安らぎを持つためには、ダビデのように主を覚え、主に信頼することしかないのです。ダビデは詩篇の別の箇所でこう言いました。２７：１**「【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。」**と。また、パウロもこのよう

に言っています。ローマ８：３１**「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」**。同じ神が今私たち、皆さんひとり一人とともにおられます。苦難の中にあるとき、私たちがダビデと同じように主を覚え、主に信頼するなら安らぎを得ることができるのです。

３．主の助けを求めること　　７－８節

そして、「苦難の中で安らぎを見出すための秘訣」の三つ目が７節と８節に記されています。もう一度テキストを見てください。**「:7 【主】よ。立ち上がってください。私の神。私をお救いください。あなたは私のすべての敵の頬を打ち、悪者の歯を打ち砕いてくださいます。:8 救いは【主】にあります。あなたの祝福があなたの民の上にありますように。　セラ」**、三つ目の秘訣は「主の助けを求めること」です。

ダビデは主が自分のために立ち上がり、**「すべての敵の頬を打ち、悪者の歯を打ち砕いて」**くださることを祈りました。敵の頬を打つというのは「相手に辱めを与える」ということです。(cf. **Ｉ列王記２２：２４「すると、ケナアナの子ゼデキヤが近寄って来て、ミカヤの頬をなぐりつけて言った。「どのようにして、主の霊が私を離れて行き、おまえに語ったというのか。」**、また、悪者の歯を打ち砕くとは「神に逆らう罪人が虚しく吐き出す悪意あることばを止めさせる、彼らの口を利けなくさせる」という意味です。

ダビデは自分に向かって迫り来る敵を主が迎え撃ってくださることを願いました。ここでダビデは自分の力で自分の知恵で仕返しをするのではなく、代わりに主が自分の敵と戦い、その敵の手から自分を救い出してくださることを求めました。どうしてでしょうか？それは「救いが主にあるから」です。ダビデは主だけが人をあらゆる危険から、希望のない真っ暗闇から救い出すことのできる力を持っていることを信じていました。だからこそ、私たちがもし、自分の力で苦難に抗おうとするなら必ず敗北します。もし、私たちが自分の知恵や計画で希望を見出そうとするなら、希望を見出すことはできず、その心は益々悲しみでいっぱいになります。私たちには私たちに降りかかる様々な問題から自分自身を救い出すことなどできないのです。しかし、神に信頼し神の助けを求めるなら主は私たちを強め、どんな困難からも私たちを救い出してくださるのです。どんな試練、どんな苦難の中にあっても私たちは恐れる必要はありません。救いの主が私たちとともにいてくださるのです。主に信頼することです。その信仰が私たちを勝利へと導くのです。

この「救い」ということばはヘブル語では「ヨシュア」と読めることばです。新約に登場する私たちの救い主イエス・キリストの名前です。そして、イエスはその名前の通り、神の小羊としてこの地上に来られ、私たちの持っていた最大の問題から私たちを救い出してくれました。聖い神の前に罪人として生まれ神に逆らい続けて来た私たちが持っていた問題は地獄での永遠のさばきでした。それこそが私たちが当然受けるべき罰でした。しかし、主はご自身の愛のゆえに、自ら進んで十字架に架かり、三日目に甦ることでこの罪の問題を解決してくださったのです。文字通り、私たちにはどうすることもできなかったその罪を、自分のいのちを犠牲にすることで赦しを与えてくださったのです。

そうだとすれば、私たちが一切解決することのできない問題さえも、愛をもって解決してくださったのが主イエス・キリストであれば、今、私たちがどんな試練や困難を経験していたとしても、主はそこから私たちを救い出してくださらない、そんなお方でしょうか？私たちを救い出す力のないお方でしょうか？パウロはこう言っています。ローマ８：３２**「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」**と。私たちの最大の問題、私たちが経験する最大の苦しみである永遠のさばきから救い出してくださった方が、今、あなたとともにいてくださるということです。どれほどの平安が私たちの心に与えられることでしょう。

しかし、もし、この中にまだこの救い主を受け入れていないで自分勝手に生きている方がおられるなら、よく覚えておかなければいけません。確かに、今経験している様々な困難、苦しみはあなたを悲しませ、絶望をもたらす苦しいものかもしれません。しかし、それよりも遥かに苦しくあわれみの一切ない永遠のさばきがあなたを待っているのです。この世の苦しみには終わりがあります。しかし、主に逆らい続ける者を待っている苦しみは終わることはありません。ですから、どうか、この主の救いを今日受け入れて、自分のすべてをささげて、イエス・キリストのために歩み出してください。

自分は救われていると思っている皆さん、自分自身の心をしっかりと吟味してください。今、この主はあなたの側におられるでしょうか？それともあなたの敵としておられるでしょうか？

最後にダビデは**「あなたの祝福があなたの民の上にありますように。」**　と、自分個人の祝福ではなく、人々の祝福を願いました。要するに、この詩篇の教える安らぎや祝福はダビデ一人のものではなく、同じ主を信じるすべての者、今日の私たちにも当てはまるということです。私たちが主の助けを求めるなら、救いの源である主は安らぎをもってその願いに応答してくださるのです。

まとめ　さて、この朝は詩篇の３篇から「苦難の中で安らぎを見いだすための秘訣」について学んで来

ました。その秘訣とは、主に自分の状況や思いを素直に打ち明け、主を覚えて信頼し、そして、主の助けを求めることでした。ダビデはとても苦しい大変な中を通っていました。しかし、ダビデはこれらのことを実践することで、希望の見えない絶望的な中において安らぎを持つことができました。

私たちもこれまでも、また、これからもいろいろな苦難を経験します。平安へのカギは「主への信頼」です。ダビデが信頼した同じ神が私たちと今ともにいて、いつも私たちのことを守っていてくださいます。救いの神があなたと今日ともにいてあなたの歩みを守り、そして、苦難の中で安らぎを与えてくださるのです。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」！！